

【安藤昌益研究の最前線（その8）】

安藤昌益の真営道医学の継承者である江戸の町医・

川村真斎による処方収集書『真斎聚方』のNo.37～39

「〔A.【中風】〕」、および「名家方選之部〔A〕」No.39～

40における処方群の「出典」の考証と考察

——真斎の「筆写・抄出方法」などから、『真斎謾筆』

と稿本『自然真営道』との内容的同一性について

考える

和田耕作

（KOSAKU WADA）

◇ 1. はじめに

安藤昌益の真営道医学を継承した川村真斎（1785～1852）による処方収集書『真斎聚方』（内藤記念くすり博物館蔵本）は、浩瀚な著作である。

この『真斎聚方』の全体的構成が、どのようなものなのかについては、「名家方選之部」〔26か所〕と「小兒門」「雜方之部 名家方選」、「本草之部 附方」という見出ししかないため、それを把握することが極めて困難である。

その巻頭部分（おもにNo.1～No.28）については、『真斎方記』との内容的同一性があるため、すでに見たようにその内容の構成を把握することが可能であった（本誌「PHN」第32号〔2018年8月号〕、参照）。

本稿では、「名家方選之部」の最初の見出し（No.39）を起点として、これを「名家方選之部〔A〕」（No.39～No.40）とし、さらにその内容と関連する「中風」の処方が収集されている部分（No.37～No.39）を、「〔A.【中風】〕」との仮見出しを付けて、考究してみよう。

●【出典】の確認のための文献一覧、その他●

- ・「出典」が明示されている中国古典医学書の類は、おもに和田文庫本の中文医学書などを使用し、できる限りその「原文」を参照して考証を行った。
- ・その他、京都大学・富士川文庫、早稲田大学・古典籍総合データベースなどのWeb公開資料などによった。
- ・『名家方選』
（山田元倫〔浅井南阜〕維亨撰、中山泰成元吉校、天明元年刊〔一七八一〕、『皇漢医学叢書、第十二冊』〔和田文庫蔵本〕所収による）
浅井南阜（山田元倫、1760～1826）には、他に『名家灸選』（文化二刊〔一八〇五〕）、『微瘡約言』（享和二年刊〔一八〇二〕）、『養生録』（文化十四年刊〔一八一七〕）などの著書がある。
- ・『続名家方選』
（村上等順〔名は図基〕編著、文化二年刊〔一八〇五〕、『皇漢医学叢書、第十二冊』〔和田文庫蔵本〕所収による。なお、一部分については、『皇漢医学叢書、第十二冊』に誤植などがあるため、京都大学・富士川文庫本を参照した。）
- ・『名家方選三編』
（平井主善庸信撰、浅井子顯惟良校、文化四年刊〔一八〇七〕、京都大学図書館・富士川文庫蔵本による）

あらうと思われる。筆者は、いまのところ原文未確認である。

- ④○ 白薇湯 (No.37) (四味) 「本事」 [普濟本事方]
 - ・主治文その他、『普濟本事方』(巻七)の【諸虫飛尸鬼疰】の項からの記載である。
- ⑤○ 八味順気散 (No.38) (八味) 「済生」 [嚴氏済生方]
 - ・主治文その他、『嚴氏済生方』(巻一)の【中風】の項からの記載である。富士川文庫本にて確認済。
- ⑥○ 烏薬順気散 (No.38) (十味) 「局方」 [和剤局方]
 - ・主治文その他、『太平惠民和剤局方』の巻一【治諸風】からの記載である。
- ⑦○ 三生飲 (No.38) (四味) 「局方」
 - ・主治文その他、『太平惠民和剤局方』の巻一【治諸風】からの記載である。
- ⑧○ 摂生飲 (No.38) (七味) 「回春」 [万病回春]
 - ・主治文その他、『万病回春』(巻二)の【中風】からの記載である。
- ⑨○ 清陽湯 (No.38) (十味) 「準繩」 [証治準繩]
 - ・『証治準繩』(第一冊)の【中風】の項にある処方であるが、主治文などが、十分に一致しないようである。
 - ・『仁術便覧』(巻一)の【中風】の項にもあり、主治文、薬物は一致。分量もほぼ一致している。服薬文は、『真斎聚方』よりも短文である。
 - ・『東医宝鑑』(雑病篇巻二)の【風痺】の項にもあり、主治文、薬物は一致。分量もほぼ一致している。服薬文も、過半程度一致している。
- ⑩○ 犀角升麻湯 (No.38) (九味) 「本事」 [普濟本事方]
 - ・主治文その他、『普濟本事方』(巻五)の【眼目頭面口齒鼻舌唇耳】からの記載である。
- ⑪○ 千金三黄湯 (No.39) (五味) 「金匱」 [金匱要略]
 - ・主治文その他、『金匱要略』の【中風歴節風病 . . . 第五】からの記載である。

⑫〇 清熱導痰湯 (No.39) (十二味) ・ ・ ・ ・ ・ 「寿世」〔寿世保元〕

- ・ 主治文その他、『寿世保元』(巻二)の【中風】の項からの記載である。

⑬〇 倉公当帰湯 (No.39) (六味) ・ ・ ・ ・ ・ 「千金」

- ・ 主治文その他、『千金要方』と同じであり、『千金要方』(巻八)の【諸風】の項からの記載である。

⑭〇 偏風 (No.39) (四味) ・ ・ ・ ・ ・ 「外台」〔外台秘要〕

- ・ 『外台秘要』(巻十四)「偏風方九首」の内の【急療偏風】からの記載である。

⑮〇 朮附湯 (No.39) (三味) ・ ・ ・ ・ ・ 「金匱」

- ・ 主治文その他、『金匱要略』の【中風歴節風病・・・第五】からの記載である。

⑯〇 滋潤湯 (No.39) (十味) ・ ・ ・ ・ ・ 「回春」

- ・ 主治文その他、『万病回春』(巻二)の【中風】からの記載である。

・ ●【考察1】● ・

以上の十六件の処方群は、次に記載されている「名家方選之部〔A〕」の処方群 (No.39～No.40) の「前段」として収集されているものといえよう。なぜなら、その主題が、ともに【中風】であるからである。

これらの処方群は、特定の一つの書物からの記載ではなく、基本的には「出典」として示された多くの「原典」からの記載である。

真斎のもとには、蔵書家として知られた父・寿庵の蔵書類が数多くあったであろうと推察される。

真斎は、基本的に「原典」の文章・内容をそのまま記載しており、改変などは、ほとんど行っていない。それは、真斎の一貫した方法である。また、「八味」以上の処方が、9処方もあり、後世方の処方も多いことがわかる。これを以て、真斎を後世方派の医師であった、と規定することは誤りである。真斎の医学的立場は、折衷派的あるいは考証学派的医学として位置づけられるべきであろう。なぜなら、次に触れるところの多紀元簡の『観聚方要補』にしても、多くの後世方の医書群から、多数の処方を引いているからである。

当時、多くの処方類を集成した書物としては、多紀元簡の『観聚方要補』(文政二年〔1819〕刊、「近世漢方医学書集成45～47、多紀元簡(五・六・七)」に収録)などが知られている。しかし、真斎の上記の処方名と同じかまたは類似の処方、十六件の内の八件ほどが確認できるものの、細部にわたって照合すると、それらは『観聚方要補』からの記載とは認められないことが判明した。したがって、真斎は独自に各医書群からそれらの処方を収集して、これらの処方群を記載したと言える。

また、例えば『観聚方要補』のように、随所に見出しを記載して、もっとわかりやすく分類して作成していれば、『真斎聚方』は相当に有用な処方集成書となったことであろう。

◇ 3. 『真齋聚方』「名家方選之部〔A〕」の処方群 (No.39～No.40)

における『名家方選』三部作〔「外因病」【中風】〕からの
処方群について
——その「出典」の考証と考察

▼左段▼

▼右段▼

〔『真齋聚方』「名家方選之部〔A〕」 / 【出典】 (『名家方選』
の処方名) / 三部作より)

○ 治中風初発者奇方 (No.39) 「四味」・・・『続名家方選』

「外因病」【中風】 (p.78)

○ 櫻葉湯 (No.39) 「四味」・・・『続名家方選』

「外因病」【中風】 (p.79)

○ 偏枯奇方 (No.39) 「三味」・・・『続名家方選』

「外因病」【中風】 (p.79)

○ 療中風着痺方 (No.40) 「三味」・・・『続名家方選』

「外因病」【中風】 (p.79)

○ 試癱瘓中風瘳不瘳方 (No.40) 「一味」・・・『名家方選』

「外因病」【中風】 (p.18)

・「亨嘗云・・・」の按文は、原文にあるもので、編者の
「山田元倫維亨」によるものである。

○ 治偏枯方 (No.40) 「八味」・・・『名家方選』

「外因病」【中風】 (p.18)

○ 治中風腹堅実者 (No.40) 「五味」・・・『名家方選三編』

「外因病」【中風】 (No.46)

○ 又方 (No.40) 「二味」・・・『名家方選三編』

「外因病」【中風】 (No.46)

○ 起死神応丹 (No.40) 「八味」・・・『名家方選三編』

「外因病」【中風】 (No.46)

○ 又方 (No.40) 「一味」・・・『名家方選三編』

「外因病」【中風】 (No.47)

○ 荊芥散 (No.40) 「一味」・・・『名家方選三編』

「外因病」【中風】(No.47)

○ 抑肝加謬飴湯 (No.40) ・ ・ ・ ・ ・ 『名家方選三編』 「外因病」

【中風】 (No. 4 7)

○ 豆淋酒 (No.40) 「十一味」 ・ ・ ・ ・ ・ 『名家方選三編』

「外因病」【中風】 (No.47)

○ 加味六君子湯 (No.40) 「八味」 ・ ・ ・ ・ ・ 『名家方選三編』

「外因病」【中風】 (No.47)

● ・ 【考察 2】 ・ ●

- ・ 以上の処方 は、『名家方選』三部作の「外因病」【中風】のすべての
処方を記載しているものである。
- ・ 真斎が薬物名を一字薬名にしているほかは、『名家方選』三部作の
内容と全く同じである。
- ・ ここにも、原典を忠実に記載するという「真斎の方法」が見てとれ
る。こうした「真斎の方法」を念頭において、『真斎謾筆』と稿本
『自然真営道』との内容的同一性について考察することが求めら
れる。

◇ 4. むすび

上記の「2.」において、『真斎聚方』「名家方選之部〔A〕」の処方群 (No.39～No.40) の「前段」としての
「〔A.【中風】〕」の処方群 (No.37～No.39) について、その「出典」の考証と考察を行い、また、「3.」におい
て、『真斎聚方』「名家方選之部〔A〕」の処方群 (No.39～No.40) における『名家方選』三部作〔「外因
病」【中風】〕からの処方群について、その「出典」の考証と考察を行った。

『真斎聚方』「名家方選之部〔A〕」の処方群 (No.39～No.40) と「〔A.【中風】〕」の処方群 (No.37～No.39)
とは、ひとつの【中風】

という主題でつながっていることが判明したが、これ以下No.40
以降の『真斎聚方』においても、このような関係性が見られるか
どうかについては、いまのところ明らかではない。

それは今後、続論において、検討されることになるであろう。

ここでひとつ注目しておくべきことは、『真斎聚方』の巻頭部分を

除く、『真斎聚方』の以上にみたような部分においては、『真斎聚方』

の巻頭部分や『真斎方記』、そして『真斎謾筆』などと比較すると、「真斎による按文」などがほとんどないことである。これはまさに『真斎聚方』の中で真斎の按文などがないところの主要な部分は、それらが「真斎による処方収集書」であることを物語っているものであるといえよう。

さて、すでにみたように、「原典」を忠実に記載するという「真斎の方法」は、『真斎謾筆』が稿本『自然真営道』の内容をかなりの精度において復元しているものであると考えられる重要な根拠となりうるものである。

[2018年9月25日、PHN（思想・人間・自然）、第33号、PHNの会発行]

[2018年9月25日、和田耕作（C）、無断転載厳禁]
